

[第29回学術集会 シンポジウム2]

家族の語りから学ぶ

元 西九州大学

高知県立大学

(座長) 正野 逸子 長戸 和子

病と共に生きる患者さんとそれを支えるご家族は、私たち看護職の想像を超えた世界を体験されている。そこで、3名の患者さんのご家族に、患者さんの療養から看取りまでの体験を語っていただき、その語りから理解を深め、患者さんやご家族の支援についての示唆を得ることをシンポジウムの趣旨とした。3名のご家族のご発表後、ナラティブ心理学とナラティブ研究をご専門とされるやまだようこ先生に指定発言をいただき、シンポジストの語りについての理解を深めた。

木下昌子氏からは「ホームホスピスわれもこうでの看取り」について語っていただいた。コロナ禍でありご高齢の為に会場参加が叶わず、われもこう代表の竹熊千晶さんによる代読となったが、配偶者を施設のスタッフと共に看取った体験とその時の想いや考えについて、たくさんの笑顔あふれる写真とともに語っていただいた。

川口有美子氏からは「母を看取り、私は生きる、ALSの患者の娘の立場から」についてライブ配信で語っていただいた。娘として在宅で母親を介護し看取るという体験、その体験を社会全体の問題として発信し、社会に働きかけていく過程における体験、その中で感じたことや考え、そして、専門職の役割として求めることについてご発表いただいた。

添田友子氏からは「精一杯生きた我が子を見送って」について語っていただいた。急性リンパ性白血病により7歳10ヶ月で病院で亡くなった娘さんの療養生活とその時のご家族の体験と想い、そして、子どもを亡くした親に共通するリアルな心情として怒りと感謝の気持ちがあることを「愛する娘を亡くし

て一子を亡くした親の実情」と題した動画でご紹介いただいた。さらに、その後の病気の子どもたちへの支援活動についてご発表いただいた。

やまだようこ先生には、3名のシンポジストの語りについて、ナラティブの観点から解説いただいた。人の語りが他の人間の経験や想いを呼び覚ます共同生成「語りが語りを呼ぶ」、負の経験をプラスに変えるレジリエントな語り「無い、でも在る語り」、一人の苦痛体験がみんなの為になり、社会的なものになる「私の経験が私たちの経験になる」について、当事者が語ることの意義と重要性をご発言いただいた。

ディスカッションでは、会場からの質問を機に、同じ疾患を持つ家族や家族員間であってもその時の体験や想いは異なることについて、意見交換が行われた。家族の中でも立場が変わることで一人ひとりの体験は異なり、個々のストーリーがあるので、家族を一括りに見るのではなく、家族員一人ひとりの語りを傾聴し、家族支援につなげる必要性が確認された。

シンポジストの語り、やまだようこ先生のご発言、そして参加者のディスカッションから見えてきたことは、家族に個々の体験の語りの機会を設け、耳を傾けることが、家族にも、看護職などケアする立場の者にも重要な意味があり、支援の鍵となることであった。

最後に、私たちのために辛いご体験を語っていただいた3人のシンポジストの皆様、竹熊千晶さん、指定発言いただいた、やまだようこ先生、ご参加いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。